

文京区の高等女学校と錦秋高等女学校	2
中勘助の『銀の匙』—文京ゆかりの文学作品—	4
元町ウェルネスパークに 元町小学校歴史展示室がオープンしました！	6
令和6年度のあゆみ	7
資料をご寄贈くださった方々	8
令和7年度の催し	8



歌川広重『名所江戸百景 水道橋駿河台』（館蔵）

文京区の高等女学校と 錦秋高等女学校

令和7年(2025)は、区内に所在するお茶の水女子大学(旧、東京女子師範学校、女子高等師範学校など)と跡見学園女子大学(旧、跡見女学校など)が、明治8年(1875)の開校から150年を迎える年にあたります。これまで文京区には、両校のほかにも特色ある女子の高等教育機関が多く設立され、日本の女子高等教育の中心地となってきました。

高等女学校の歴史と文京

女子高等教育の中心地であった文京区は、女子中等教育の中心地でもありました。女子の中等教育に関しては、明治24年に公布された改正中学校令において、男子の尋常中学校にあたる教育機関として、女子の「高等女学校」が定義されました。その後、女子教育拡充の機運の高まりを受けて、明治32年には独立して女子の中等教育について規定した高等女学校令が公布され、各地に高等女学校が設立されるようになりました。

文京区内では、明治33年に東京府立の府立第二高等女学校と東京女子師範学校〔註1〕が小石川区竹早町(現、小石川四)に、教育者の西澤之助が日本高等女学校を本郷区龍岡町(現、湯島四)に設立したのを皮切りに、次々と高等女学校が設立されました。明治34年に日本女子大学校附属高等女学校が小石川区高田豊川町(現、目白台二)、明治42年に京華高等女学校が小石川区原町(現、白山五)に設立されています。また、小石川区丸山町(現、千石三)の淑徳女学校が明治38年に、小石川区表町(現、小石川三)の淑徳女学校は明治39年に、それぞれ認可を受けて東洋高等女学校、淑徳高等女学校を設立しています。高等女学校令の公布から10年の間に、文京区域では6校の高等女学校が開校されました。この間に東京府下で設立された女学校は23校なので、その約4分の1が文京区内で設立されたことになります〔註2〕。これらの学校が、都立竹早高等学校、相模女子大学附属高等学校(現在は神奈川県)、日本女子大学附属高等学校(現在は神奈川県)、東洋女子高等学校、京華女子高等学校、小石川淑徳学園高等学校などとして、いまでも活動を続けていることも特色の一つと言えるでしょう。

100年以上の長い歴史を誇るこれらの学校と比べても、現在のお茶の水女子大学附属高等学校の前身にあたる女子

高等師範学校附属高等女学校は、特別な歴史を持つ高等女学校でした。明治5年、神田区(現、千代田区)竹橋近くに開校された東京女学校は、新しい日本の女子教育機関の先駆けとなりました。東京女学校は、明治8年には入学資格を小学校卒業程度に引き上げ、小学校を卒業した女子にさらなる教育機会を与える機関として位置付けられました。この学校は明治10年に廃止され、一部が東京女子師範学校内に設置された英語科に移されました。その後、東京女子師範学校予科、私立女子師範予備学校などと所属や名称の変更があり、明治15年には東京女子師範学校附属高等女学校として湯島で開校されました。ここでいう「高等女学校」は、単にこの学校の名称であり、教育機関として制度化された高等女学校はまだ存在していませんでした。



「東京女子高等師範学校附属高等女学校
秋期運動会の光景 其五(米艦歓迎)」

明治19年、東京女子師範学校が東京師範学校と合流した際には、この学校は附属を離れて独立した文部大臣直轄の東京高等女学校となり、翌年には文部省直轄となりました。東京高等女学校のカリキュラムは、男子の中学校と遜色の無い内容だったとも言われ、英語や数学などの高度な教育がおこなわれていたと伝えられています。明治19年は、男子の中等教育のあり方を規定した中学校令が公布された年であり、そこで規定された尋常中学校と同程度の教育が、東京高等女学校でも目指されていたのでしょうか。この学校は、明治23年には再び女子高等師範学校(東京女子師範学校の後身)の附属となり、現在のお茶の水女子



東京女高師附属高女校友会
『お茶の水』第一号
(大正13年)

大学附属高等学校へと続いています。

現在の学校名にある「お茶の水」とは、学校が所在していた神田川沿いの溪谷の俗称であり、この学校の校友会が発行していた、校友会雑誌の名称でもありました。

秋間為子と錦秋高等女学校

先に挙げた学校以降も、文京区内には多くの高等女学校が設立されています。

大正元年（1912）、教育者の秋間為子（1861-1933）が、本郷区真砂町（現、本郷二）に錦秋実科高等女学校を設立しました。東京府南多摩郡七生村（現、日野市）出身の秋間は、明治22年に帝国大学医科大学の看護婦養成所を一回生として卒業し、同25年には鈴木まさ子と日本初の看護婦会を設立、同27年には本郷区元町（現、本郷二）に博愛看護婦学校を設立しました。また赤十字の募集に応じて日清戦争に従軍し、広島での救護活動に参加、後に勲八等寶冠章を下賜されています。

明治34年、看護婦学校を閉じた秋間は、東京に遊学する女子の寄宿先として、本郷区元町（現、本郷一）に錦秋女塾を設立しました。明治42年には、同所で錦秋実用女学校も設立しています。秋間は、社会で活躍する女性の教育をうたい、通常の高等女学校が卒業に約5年を要することを長いと考え、2年で同程度の教育を受けられる学校を設立したと伝えられています。この学校は、関東大震災の影響で入学希望者が減少し、大正15年に廃止されて錦秋中等実業女学校に引き継がれました。



秋間校長と錦秋高等女学校校舎
（錦秋高等女学校『卒業記念帖』昭和3年より）

秋間為子が設立した実科高等女学校とは、明治43年の高等女学校令改正で規定された、家事や裁縫などの“実科”を重点的に教育する高等女学校で、秋間の主張とも合致する2年程度で卒業できる形態の高等女学校でした。この学校は、大正11年には錦秋高等女学校へと昇格し、更に幅広い教育をおこなうようになっていきます。大正15年に

は、夜間部にあたる錦秋中等実業女学校も設立されました。

秋間は、昭和2年（1927）には財団法人錦秋学園を設立し、錦秋高等女学校と錦秋実業高等女学校（錦秋中等実業女学校の後身）の経営を法人に移しました。

この学校では、（一）敬神崇祖、（二）教育勅語、（三）婦徳涵養、（四）教育の実際化、（五）勤儉質素の五項目を教育の要旨として掲げていました。また秋間は、学校経営のかたわら内務省の嘱託を受けて、全国で勤儉質素を説く講演会もおこなっていました。昭和10年代に錦秋高等女学校で国史、国語、英文法の授業を担当した高橋礪一（1913-1985）は、当時の学校の生徒について「この学校の生徒はほとんどが下町育ち、下谷、浅草、本郷辺りの子どもが多かった」と書いています。また学校の雰囲気について、「点数を友だちと争うこともすくなく、受験にもわずらわされない」と評しています。

財団法人錦秋学園は、戦後の学制改訂を受けて旧制の高等女学校を廃校し、昭和22年に錦秋中学校を設立、昭和23年には錦秋学園高等学校を設立して教育活動を続けました。しかし昭和39年に学校に面する春日通りの道路拡張が発表され、昭和43年から新入生の募集を停止することになりました。

現在でも、真砂坂の途中には、錦秋学園の活動を伝えるプレートが残されています。また学校法人錦秋学園は、現在も多摩市で錦秋幼稚園を運営するなど、本郷は離れましたが活動を続けています。



錦秋学園所在地の現状
（令和7年撮影）

文京ふるさと歴史館では、出張パネル展示として、令和8年2月に文京シビックセンター1階アートサロンで、文京区域における女子高等教育の歴史を紹介する予定です。

（加藤 芳信）

〔註1〕 官立の東京女子師範学校とは違い、東京府立の女子師範学校。この学校は高等女学校ではないが、府立第二高等女学校と同じ敷地に設立された。

〔註2〕 後述する東京女子師範学校附属高等女学校と明治21年開校の府立東京高等女学校（現、都立白鷗高等学校、附属中学校）が既に存在していたので、府下の高等女学校は25校、そのうち文京区内に所在する学校は7校だった。

【参考文献】

『錦秋高等女学校校長秋間為子女史の足跡』1932
高橋礪一『歴史 わが人生』1979

中勘助の『銀の匙』 —文京ゆかりの文学作品—

『銀の匙』

文学のまち・文京には、この地を舞台とした多くの文学作品があります。今回はそうしたゆかりの作品のなかから、中勘助（1885-1965）の著作『銀の匙』についてご紹介します。

『銀の匙』は小石川区小日向水道町（現・小日向2あたり）に暮らした文京ゆかりの作家・中勘助の自伝的小説とされるものです。「生きもののうちでは人間がいちばん嫌ひであつた」^{*1}という繊細・多感な少年が、「伯母」の愛と庇護を受けつつ、さまざまな出会い・別れをとおり成長していく物語でもあります。そしてそのおもな舞台のひとつが文京の地と考えられています。作品の初出は、いわゆる前編が1913年4月8日から6月4日まで、さらに後編が「つむじまがり」として1915年4月17日から6月2日まで、ともに東京朝日新聞に連載されました。

当時無名とされる勘助の作品連載に際しては、夏目漱石（1867-1916）の推薦がありました。和辻哲郎（1889-1960）による『銀の匙』（岩波文庫）の解説には「この作品の価値を最初に認めたのは夏目漱石である」、「作品は翌年漱石の推薦によって東京朝日新聞に掲載せられた」とその事情が語られており、また作品について「大人の見た子供の世界でもなければ、また大人の体験の内に回想せられた子供時代の記憶というごときものでもない」とし、「不思議なほどあざやかに子供の世界が描かれている」と評しています。その独自の作品世界は多くのひとびとに着目され、感銘を与え、100年以上も読み継がれる名作のひとつとなっています。また灘校教師・橋本武（1912-2013）が担当する中学校3年間の国語授業のテキストに、この一冊が用



館蔵『銀の匙』



中勘助^{*2}

いられたことは、広く知られています。

館蔵『銀の匙』

新聞連載終了から数年後、それらをまとめる形で単行本『銀の匙』が発行されます^{*3}。この本には、13頁からなる多くの正誤表が掲載され、また後に著者自身が印刷用の型紙の破棄を申し出るなどした一冊となっています。館蔵『銀の匙』は、こうした経緯の後、著者自身が装丁などを指示、発行（1926年 岩波書店）された、こだわりの一冊と見られています^{*4}。奥付には「第一刷」「定価二円三十銭」とあります。

この館蔵『銀の匙』は、2024年1月5日から3月24日、当館常設展示室二階ミニ企画「中勘助の『銀の匙』—文京ゆかりの文学作品—」で展示しました。

著者・中勘助

勘助の父・中勘彌は旧今尾藩士であり、明治時代には竹腰家（旧今尾藩主）の家令などを勤めています。そうした事情のもと、勘助は1885年、神田区（現・千代田区神田）東松下町の竹腰家屋敷地を出生地としています。一家は勘助誕生の4年後、1889年に小日向水道町（現・小日向2あたり）に移り、勘助はここで幼少期を過ごしました。その後、第一高等学校、東京帝国大学国文科を卒業、陸軍への短期間の入隊・除隊等を経て、本格的な文学活動をはじめます。大正期以降、中家は小日向の地を離れますが、勘助自身は滋賀や長野、我孫子、平塚、都内各所ほかに仮寓、執筆活動をすることも多々あったようです。また戦中・戦後は静岡の地で暮らし、その後東京都中野区に移り、ここを終焉の地とします^{*5}。

著作に『銀の匙』ほか『提婆達多』『街路樹』など多数を発表しています。

作品ゆかりの地・ゆかりの人

『銀の匙』は生地・神田から文京の地へ移った事情について、「病身者の私はしょつちゅうお医者様の手をはなれるまがなかつた…私と母の健康のためにどうしても山の手の空気のいいところへ越さなければといふ高坂さん（医者）の説によつて…父は、自分の役目を人にわたして小石川の高台へ引越すことに決心した」と記載しています。そうして越して来た自宅周辺の地を、作品では「赤土の長い坂」と表現、また「それまで坂といふものを知らなかつた」としています。このような独特の視点と表現は、この作品全般にわたる味わいどころのひとつかもしれません。

中家のあった小日向水道町近辺には多くの坂道がありま

す。現在、知られているところで「長い」と形容されたとすれば、服部坂（小日向1と2の間）、大日坂（小日向2）ほかをあげることができます。とりわけ中家に一番近いのは服部坂となるでしょう。ちなみに江戸時代の地誌『続江戸砂子』は服部坂について、「此所は服部権太夫殿代々住居の地也」とその由来を伝えています。

また小日向水道町について、『新撰東京名所図会』（1906年）は、「商業極めて殷賑なり、地牛込に接し区内屈指の繁華と称せらる」とその様子を伝えています。この繁華な世界は、作品のなかではあまり登場しません。しかし作品の背景として、そこから坂を上った広く閑静な地で、中家は生活していたという理解になると思います。

作品には「お国さん」、「お蕙ちゃん」など近隣の友だちとの出会いや別れ、学校生活などが、切なくそして繊細に描かれています。それらは、小日向水道町にあった黒田小学校での学校生活・体験が作品に投影されているものと理解されています。

さらに作品には、近所の「待宵の咲いてゐる原」というものが印象深く登場します。そこは「杉や榎や樺などの大木が立ちならんだ崖のうへから見わたすと、富士、箱根、足柄などの山がかうかうと見える」場所で、主人公は「いつになく喜んで昼飯」を食べるのですが、「折あしくむかふから人がきたもので、すぐさま箸をはふりだし」、「もう帰る」と言い出します。ここで誕生した印象的な文章が、冒頭にある「生きもののうちでは人間がいちばん嫌ひであつた」です。

このほか作品には、大日堂の縁日の様子や周囲の寺社、樹木、草花など、100年以上前の文京の四季が、主人公の感覚をとおり瑞々しく描かれています。

以上、館蔵の文京ゆかりの文学作品のなかから選りすぐりの一冊をご紹介します。作品のみどころは、まだまだたくさんあります。もう既に読んでいる方は、地域という視点で今一度、まだお読みになっていない方はぜひこの機会に、文京ゆかりの作品世界をご一読、ご堪能していただければと思います。

（東條 幸太郎）

※1『銀の匙』（1926年 岩波書店）より。以下とくに断りのない引用は同書による。ちなみに岩波書店創業者・岩波茂雄は勘助の第一高等学校時代の同級生。

※2『飛鳥：詩集』 1951年 中勘助（国立国会図書館デジタルコレクション <https://www.dl.ndl.go.jp/pid/1352894> サイト参照 2025/04/27）より

※3 岩波書店発行。奥付によれば発行年は1921年。正誤表に関することわり書きは翌年記載となっている（国立国会図書館デジタルコレクション <https://www.dl.ndl.go.jp/pid/977847> サイト参照 2025/04/27）。

※4 岩波書店webサイト（<https://www.iwanami.co.jp/book/b23742.html> サイト参照 2025/04/27）を参照した。

※5『中勘助全集』（1962年 角川書店）年表より。以降、勘助の経歴等に関してはおもに同書より。

おもな参考資料

『中勘助全集』 1989-1991年 岩波書店

「『銀の匙』の本文調査」（『同志社国文学』）堀部功夫 1984年

『中勘助の手紙 一座建立』稲盛道三郎 1995年 中央公論社

『中勘助の恋』富岡多恵子 2000年 平凡社

『奇跡の教室』伊藤氏貴 2012年 小学館

『中勘助『銀の匙』を読む』十川信介 2012年 岩波書店



『銀の匙』と小日向水道町MAP

※ 囲みの中が旧小日向水道町 → (坂道)の先は坂下を示す

出典：『東京市小石川全国』 東京郵便電信局 明治38年(1905)発行

元町ウェルネスパークに元町小学校歴史展示室がオープンしました！



元町ウェルネスパーク外観イメージ(清水建設株式会社提供)



展示室内



展示室リーフレット

元町ウェルネスパークは、文京区と順天堂大学の協働事業として『歴史性に配慮しつつ、災害に強い、多世代が集えるにぎわいのある空間の創造』をコンセプトとした複合施設です。旧元町小学校の敷地に建設されたこの施設内に、令和7年4月1日歴史展示室を開室しました。

旧元町小学校は、関東大震災で校舎が焼失したことから帝都復興事業のひとつとして現在地に移転・建設され、耐震耐火を備えた鉄筋コンクリート造の小学校です。この展示室は、建設当時（昭和2年・1927年）の普通教室を復原しています。

本展示室では、当時の建築部材や校舎模型等を展示し、小学校のあゆみを映像やタッチパネル式のデジタルアーカイブで紹介しています。

ぜひ、ご覧ください。

所在地：文京区本郷一丁目1-19

元町ウェルネスパーク 東館3階

開室時間：午前9時～午後5時

休室日：年末年始(12月29日～1月3日)

※その他施設整備の保守・点検等で臨時休室することあり

見学料：無料

電話：03-5654-5715(代表)

交通アクセス：・JR 中央・総武線 水道橋駅 徒歩5分

・都営地下鉄(三田線)水道橋駅 徒歩4分

・JR 中央・総武線 御茶ノ水駅 徒歩9分

・東京メトロ(丸ノ内線)御茶ノ水駅 徒歩8分

・東京メトロ(千代田線)新御茶ノ水駅 徒歩11分

・Bーぐる(本郷・湯島ルート)東洋学園大学前
徒歩4分



令和6年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「ブンタとタイムトラベル 昔のくらしをのぞいてみよう！」

◆7月20日(土)～9月1日(日)

参加者数……234人

特別展

「川と人と水道とー神田上水・千川上水と文京」

◆10月26日(土)～12月8日(日)

入館者数……3,009人

◆記念講演会

11月30日(土) 会場:男女平等センター

参加者数……68人

「法制史からみた江戸上水の管理」

／坂詰智美氏(専修大学法学部教授)

文の京ゆかりの文化人顕彰事業

◆朗読コンテスト

応募総数……274人

本選11月3日(日・祝) 会場:跡見学園女子大学プロッサムホール

課題作家:泉鏡花、五木寛之、井上靖、桐野夏生、徳田秋聲、室生犀星

本選出場者数……15人 観覧者数……115人

◆歴史講演会

「竹久夢二が暮らした文京」石川桂子氏(竹久夢二美術館学芸員)

1月19日(日) 会場:男女平等センター

参加者数……90人

◆史跡めぐり

「金沢ゆかりの文人たち」

2月6日(木)

参加者数……17人

ミニ企画

◆①3月27日(水)～6月23日(日)

「小石川御殿から江戸城へ 新収「服部家資料」の紹介」

◆②6月26日(水)～9月23日(月・祝) 「子どもの豆本」

◆③9月26日(木)～12月22日(日)

「児童文学者石井民治、近代水道を科学する」

◆④1月5日(日)～3月23日(日)「季節の作品一春一」

史跡めぐり

◆「神田上水を辿る(前編)」10月31日(木)

参加者数……29人

◆「神田上水を辿る(後編)」12月5日(木)

参加者数……41人

◆「大塚、雑司ヶ谷を巡る」3月6日(木)

参加者数……48人

ワークショップ

「あなたの名所ものがたり

～声によるコミュニティ情報のアーカイビング～」

◆第1回 1月26日(日) 会場:湯島地域活動センター 参加者数……2人

◆第2回 2月9日(日) 会場:向丘地域活動センター 参加者数……1人

入館者数60万人

令和7年3月7日、文京ふるさと歴史館は開館以来の総入館者数が60万人を超えました。ありがとうございます。



歴史教室



特別展



朗読コンテスト



ミニ企画①



歴史講演会



ミニ企画④

資料をご寄贈くださった方々 (五十音順・敬称略)

令和7年度の催し

*それぞれの事業の開催日時や募集方法等は、歴史館ホームページおよび「区報ぶんきょう」にてお知らせします。
ホームページ: <https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/index.html>



小・中学生のための歴史教室

ミリョクを発見! ~お気に入りのオススメしよう~
7月19日(土)~8月31日(日)

ワークシートを使って館内の展示を紹介するイベントを実施します。事前申込不要、参加者には記念品を贈呈。

文の京ゆかりの文化人顕彰事業 歴史講演会

文京ゆかりの文化人に関する講演会を予定しています。
※参加者は区報等で募集します。

文の京ゆかりの文化人顕彰事業 朗読コンテスト

本選 11月2日(日) 13時~16時

会場 跡見学園女子大学プロッサムホール

「作家になった教師たち」と題し、夏目漱石、小泉八雲、徳富蘆花の作品を朗読します。

※参加者・観覧者募集の方法等は、区報等でお知らせします。

ワークショップ

東京大学との協働事業として行います。

※参加者は区報等で募集します。

出張パネル展示

近代の女子高等教育と文京(仮)

2月17日(火)~2月23日(月・祝)

会場: 文京シビックセンター 1階アートサロン

“文の京”文京区における女子教育の歴史と広がり、パネル展示で紹介します。

史跡めぐり

歴史館友の会まち案内ボランティアが、史跡等をご案内します。

※参加者は区報等で募集します。

参加費 40円程度(保険代として)・入館料等実費

常設展示ボランティアガイド

ふるさと歴史館ボランティアガイドが、日曜日、祝日、午後1時から5時まで常設展示の解説を行います(申込不要・入館料のみ)。上記日時以外のご希望も受付けています。3週間前までに、文京ふるさと歴史館へ電話連絡し、申請書を提出してください。

※地下の展示環境の整備のため、令和7年度は特別展、及び収蔵品展を休止します。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。常設展示、ミニ企画、小・中学生のための歴史教室は通常通り開催する予定です。

利用のご案内

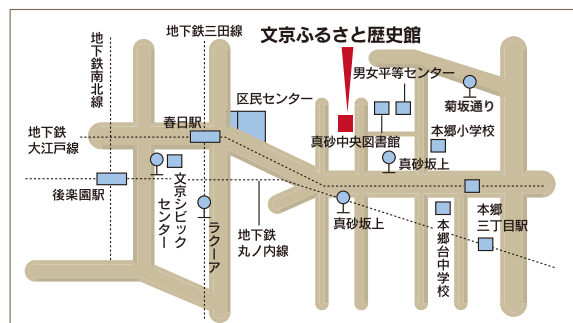
◆開館時間: 午前10時から午後5時まで

◆休館日: 月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日)
くんじょう期間、年末年始

◆入館料: 一般個人100円、団体(20人以上)70円
中学生以下・65歳以上無料
※特別展は別に定めます

◆交通: 東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
都営バス 都02 上69 「真砂坂上」から徒歩1分
文京区コミュニティバスBーぐる「文京シビックセンター」または「ラクーア」から徒歩10分、「菊坂通り」から徒歩6分

◆ホームページ: <https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/index.html>



文京ふるさと歴史館

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号
電話(03)3818-7221